

# 極小未熟児の親子相互作用

研究協力者

竹内 徹（大阪府立母子保健総合医療センター）

## 1. 目的

われわれは、過去3年間とくに極小未熟児における親子相互作用の研究をつづけてきた。現在までは、主として両親（とくに母親）の行動を、児の臨床経過と共に観察してきた。方法としては、VTRによって記録された行動分析と母親（または父親）のインタビュー・アンケート調査と対比させて、児の成長に伴う母親の児への働きかけを観察してきた。今後はとくに極小未熟児の相互作用の場面での養育者に対する行動を分析し、生後の成熟に伴う児の行動の変化を観察することを目的とした。

## 2. 対象および方法

対象は、できるだけ長期にわたって新生児病棟で観察可能な極小未熟児とくに出生体重1000g未満の超未熟児を対象とした。方法はVTRを用いて24時間連続記録可能な装置を用いた。当センターは、新生児室としてNICUベッド20床、回復期ベッド40床を持つ。NICUおよび回復室には、それぞれ2台のVTR用カメラを設置して、特定のベッドを中心に、経時的観察記録を日常診療の体制を変更することなく続行できるよう工夫した。対象は61年度は、予備的観察として、超未熟児4例を選んだ。在胎週数24週（全例同一週数）、平均出生体重549g（512—906g）、母親の年齢平均28歳（25—32歳）、経産3名、初産1名。児の平均在院日数151日（102—200日）、面会回数平均57.5回（47—72回）、観察平均回数18回（16—22回）、平均総観察時間537分（476—624分）であった。そのうち比較的臨床経過に重篤な合併症のなかった症例を代表例として提示する。

## 3. 結果

症例Kは、出生時体重512g（在胎24週）の超未熟児で、軽度の慢性肺炎患のため、生後39

日間人工換気療法を施行した例である。VTRによる記録の行動分析方法は、15秒間を1コマとして、一定時間内の総コマ数中にある行動の発現する頻度を%で表現した。図1は、「保育器場面」で母親が児を積極的に見て、児からより多くの情報を得ようとしている指標と考えた「探索的注視」「上体前傾」「顔合せ」（en face）の3つの行動の生起状態を、生後日齢による変化をみたものである。保育器場面では、3行動には増減傾向はみられなかったが、上体を児の方に前傾させて見る「上体前傾」（lean forward）が最も頻繁に観察された。それに対して、en face行動の生起率は全例において正期産児と比較して低値であったのは、この時期には超未熟児の持つ外観、自発運動の減少または児の意識レベルなど、児の特性に起因して母親の行動が大きく影響されているものと思われる。また一方、これは母親が児との視覚接触を試みようとする積極的な行動の表出とも考えられる。

なお接触行動については、保育器場面では「抱き場面」（ほとんどコット保育場面）に比較して接触行動の生起率ははるかに低かった。しかし接触行動の質的分析によると、児の加齢に伴い、母親の接触行動は主として指先を用いる接触から、主として手掌全体を用いた接触行動へと変容していく心理的過程が行動に表出されたものと推察される。またあやし行動の種類や生起率に個人差がみられ、母親の児に示す行動のレパトリーに個性がみられた。母親の発達生育歴の一つの結果とも考えられる。症例Kでは、気管内挿管チューブが39日で抜去されたので、その後からあやし行動が次第に出現しているのをみると、母親の行動の変容させる大きな要因の一つとして、児の一般状態とそれに関与

する医療内容の質が考えられた。

#### 4. 考按および結語

未熟児とくに超未熟児の出産は、両親によって養育上の危機的状況である。しかし早期より事態に直面し、両親がわが子の臨床経過をできるだけ正確に認識していくことは、その後の育児上に決して消極的な影響を与えないものと思う。すでにわれわれは、母親の初回対面時の行動分析をとくに母親の表情を中心にして分析した。その際明かになったことは、母親の積極的な感情の表出は、児の能動的または反応的行動によって明かに誘発されるということであった。相互作用の場面では、とくに児の特徴が重要な因子となる。とくに超未熟児の生後の急性期には、外見上はるいそうした状態で弱々しく、反応性がなく、決して母親の行動を誘発するような姿ではない。しかし臨床状態の改善に伴って、両親の反応性が高まってくることは、図1、図2に示した母親の行動分析結果をみても明かである。

今後は、養育者（とくに母親）および医療従事者の保育行動に対して、超未熟児がどのような反応をするか、児の加齢と共にどのように変化するかを観察する必要がある。なかでも、未

熟児の表情とくに顔をしかめる表情、また医療的・看護的ケアに対して「frown」の表出を、とくに超未熟児の alarming expression としてとらえていく予定である。回復期になれば、表情の変化以外の行動がみられるようになるが、加齢と共に変化する微笑の場合とは逆に、苦痛の表情はより複雑化するようである。これらを経時的に分析することは、単なる苦痛の表情の ontogeny を知るだけでなく、新生児医療および看護への貴重な feedback となるであろう。

母親にとっては、新生児病棟とくに急性期を取り扱う集中治療室では児の観察的行動に終始し、むしろ事態の理解を深める努力をする行動が多い。しかし自分の子供を抱き保育できる場面では、語りかけや、顔面表情および頭部の動きによるあやし行動、揺らす行動が多くなってくる。おそらく児からの信号を受け入れ、解釈し、それに対して適切な対応をしている場面と想像できる。今後は児の反応を相互作用の場面で分析していく必要がある。（なお図1、図2は、大阪大学人間科学部糸魚川直裕教授および同教室大学院生山本悦代氏の分析によるものである。）

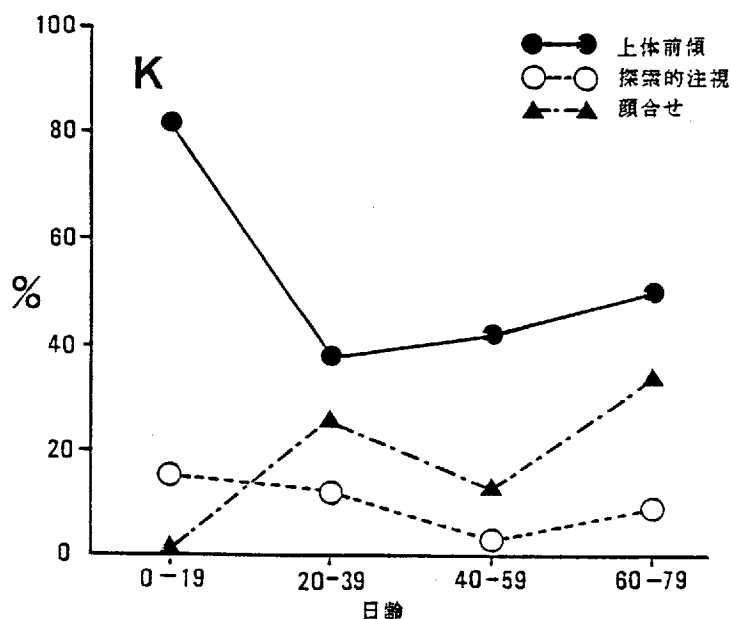


図1 K : 「身体の動き又は特有の姿勢を伴う視覚定位行動」の保育器場面での生起率の変化

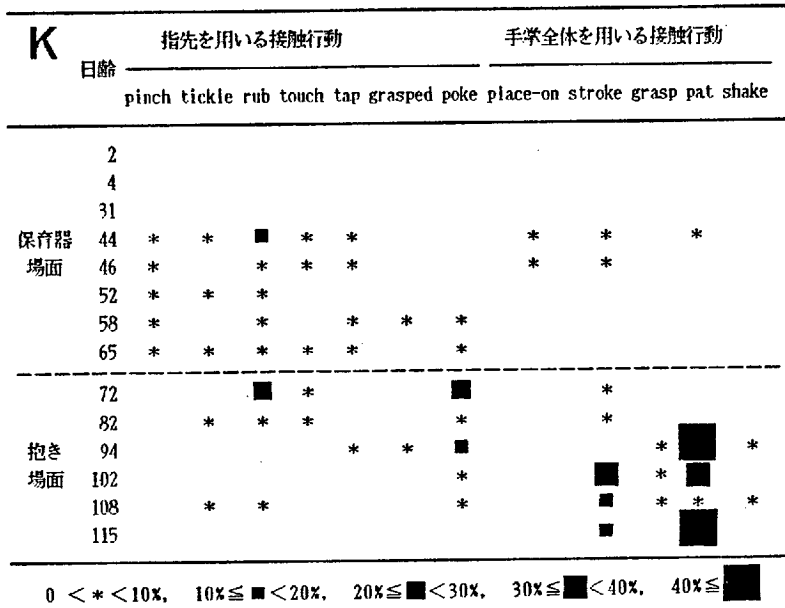
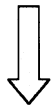


図 2 K : 接触行動の質的变化 - 各接触行動の生起率の変化



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



## 1. 目的

われわれは、過去3年間とくに極小未熟児における親子相互作用の研究をつづけてきた。現在までは、主として両親(とくに母親)の行動を、児の臨床経過と共に観察してきた。方法としては、VTRによって記録された行動分析と母親(または父親)のインタビュー・アンケート調査と対比させて、児の成長に伴う母親の児への働きかけを観察してきた。今後はとくに極小未熟児の相互作用的場面での養育者に対する行動を分析し、生後の成熟に伴う児の行動の変化を観察することを目的とした。